

ツマベニチョウだより第21号

今年になって始めてのお便りを差し上げます。

お陰様で5年目を迎えました。今年は節目の年ですので今まで以上に努力して行きたいと存じます。有り難いことに各方面の方々のお力添えが着々と具体化しつつあり、逐次明るい話題をお伝え出来るものと思います。その第一報として昨年暮れのことでしたが次をご覧ください。

猪崎鼻にツマベニチョウの飼育観察舎ができました。

「大堂津平成会」(会長日高匡慶氏、会員21名)の皆さんが、昨年の12月9日に猪崎鼻の旅荘に隣接した空き地に、ツマベニチョウ用のビニールハウスを造られました。新聞の報道によりますと10月中旬に鹿児島市の平川動物園に会員10名が見学に行かれ、ツマベニチョウについていろいろと研修を受けられた由。そのハウスを今年の1月24日に見に行きました。ハウスは90平方メートル(6メートル×15メートル)の見事なものでした。私も嬉しくて直ぐに役に立つランタナの成木6本をハウス内に植栽させてもらいました。

猪崎鼻の飼育観察舎の利用法等について話し合いをしました。

毎月の第2日曜日には「大堂津平成会」の皆さんが作業に集まられると聞いていたので、私も当日(2月10日)に猪崎鼻を訪ねました。そこで会員の方から「当方の準備が整い次第鹿児島市の平川動物園のツマベニチョウの成虫5~6つがいと、卵30個ほどを分けてもらって飼育に取りかかる予定」と伺いました。このことについては専門家のご意見を聞く必要があると考えた私は早速その夜、中尾景吉氏(宮崎昆虫同好会副会長)に電話でお話してご指導を仰ぎました。中尾氏も驚かれて鹿児島市の福田晴夫氏(前日本蝶類学会会長)とも話し合わせ「鹿児島に定着しているものと、日南海岸沿いに北上しているものとの混同は避けた方がよいのではないか」と教えて下さいました。よって「大堂津平成会」の緒方事務局長と尾崎副会長にその旨を話しましたところ了承されて取り止めになりました。

なお当面の飼育観察舎の利用方法として、5月にやって来るアサギマダラを対象にしてチョウの飼育方法等を学びつつ、ツマベニチョウについては対岸の大島から飛来して猪崎鼻のギョボクに産卵したものを採集して飼育観察することを提案しました。(これなら日南海岸産のチョウなので遺伝子的にも問題はなく、同時にその増殖に役立つものと思います)。

伊比井神社のギョボクとハイビスカスを猪崎鼻に移植しました。

伊比井神社境内のイヌマキの古木数本が、害虫被害により早急に伐採することになった旨の連絡が地区の水元区長さんからありましたので同氏とも相談の上、ギョボク8本とハイビスカス15本を移植することにしました。3月9日に「大堂津平成会」の会員5名の方に来ていただいて掘り取ってもらい猪崎鼻に移植しました。相当生育していましたので「大堂津平成会」の皆さんには大変お世話になりました。

ツマベニチョウの天敵対策について

昨年潮小学校で産卵したツマベニチョウの卵と幼虫のほとんどはアリとアシナガバチに襲われて、飼育ケースに移したものの他は全滅しました。その経験からアリがギョボクに上れないようにするにはどうしたらよいか。平川動物園では水を張った受け皿に鉢植えのギョボクを置い

て受け皿が堀の役目を果たすようにしてありました。しかしそれではギョボクを鉢植えにする必要があり、地植えしたものには応用出来ません。いろいろ考えた末にバイクの古タイヤを利用することを思い付きました。そこでバイク屋さんから古タイヤをもらって帰って庭先で試験しました。先ず中にギョボクを入れてタイヤをそのまま地面まで下ろし、隙間がないように半分ほどタイヤを土に埋めました。次にタイヤに水を入れると丁度ギョボクを中にして堀を造ったようになり、木の根元に砂糖をこぼしておいてもアリは1匹もやって来ませんでした。

タイヤの直径は12インチで2~3年生のギョボクなら枝を傷めることなく通せます。作業は至って簡単です。目下潮小学校でも実験してもらっています。なお、3月6日に組坂教頭先生が宮崎市内のバイク店まで来て下さって、古タイヤ12本を持ち帰っていただきました。また猪崎鼻でも実施してもらおうと、伊比井神社のギョボクを取りに来てもらった時に古タイヤ5本を差し上げて、トラックで持って帰ってもらいました。

アシナガバチについては幼虫が付いた時点で防虫網をかぶせて防止したいと考えています。

南郷の亜熱帯作物支場内にギョボクが植えられていました。

南郷町賛波の県総合農業試験場亜熱帯作物支場がリニューアルし、4月1日に一般公開されました。総面積36ヘクタールの中には19ヘクタールの有用植物園があり、そこに植えるギョボクの苗を以前に差し上げたことがありますので早速同日に見に行つて来ました。

お忙しいなかを亜熱帯作物支場の福島技術員が案内して下さいた所は山の中腹で、まるで幼木を見守るかのように側に3メートルほどの自生のギョボクが植えられていてよい環境でした。この作物支場は新聞でも報道されましたがとても景色のよい所で、県南の一大観光スポットになるに違いありません。そこにツマベニチョウが飛び交う姿を想像して楽しくなりました。ただバスの便が悪く、この支場に行くためには「実習農場前」という、坂の中腹で下車して急坂を800メートル上り、更に600メートル下らなければなりません。マイカーなら兎も角徒歩ではきついと思いました。峠には「道の駅なんごう」も完成していましたので、せめてそこまででも停留所を移動させていただくようにと関係機関をお願いしておきました。

ツマベニチョウ誘引の先駆者がおられました。

私がツマベニチョウの増殖誘引を始める前にそれを手がけ、平成11年の秋にはこのチョウの羽化に成功された方があったことがこの程分かりました。宮崎市自然休養村センターの常務理事宮川千明さんがその人です。宮川さんは平成7年に就職されて間もなく沢山のチョウが飛来することから翌年の春、出身地の日南市宮浦からギョボクの苗を採って来て植えるとともに、ランタナやハイビスカスなどの花木を挿し木して年々増やし続けられた結果、その他の花木とともに園内がすばらしい花園になった由。ツマベニチョウがやって来たのは11年10月10日でギョボクに数個産卵して飛び去り、やがて孵化した幼虫が脱皮を繰り返してサナギになり、無事に羽化したものを写真にも収められていました。

鶴戸神宮から30キロも離れた宮崎市加江田地区でこのチョウが羽化した事実は、増殖誘引を志すものとして心強いことで、今後は相携えてその実現に努めたいと思います。

今年始めの挿し木をしました。

4月13日にヒメノウゼンカズラ60本の挿し木を行いました。

平成14年4月20日

海老原秀夫